川の本

1997 夏の号

No. 43

天竜かっぱのいちだいじ

てんりゅう

（伝説　長野県伊那地方）

むかし、天竜川に太田切川が流れ込むあたりに、天竜かっぱがすむ下り松と呼ばれる大きな淵があった。

この淵には恐い雨竜がひそんでいるというわさがあった。村人はおそれて誰一人近寄ろうとはしなかったが、ここにすむかっぱたちには雨竜のうわさは都合がよかった。静かな淵でのどかに暮らせたからじゃ。

「ここで、わしらかっぱがのんきに暮らせるのは雨竜さまが守ってくださっとるからじゃ。あばれると恐い雨竜さまじゃが、いまに天竜さまになられるお方じゃ。川の水はきれいだし、こんなによい淵は、ほかにはない」

長老かっぱはいつも、この淵と雨竜を自慢にしておった。

ところが、ある年の秋のこと。くる日も、くる日も、雨がふりつづき、天竜川の水かさがどんどん増えた。そこへ太田切川の急流が滝のような勢いで流れ込んでくる。とうとう、大洪水になってしまった。

こうなっては、さすがの天竜かっぱも、のんきにしてはおれない。

「ぐずぐずしてると流されるぞ、淵の底に避難しろ」

長老かっぱに従って、かっぱたちはいっせいに「ひゅうい、ひゅうい」と悲鳴をあげながら、淵の底ふかくもぐりこんでいった。

そのときだった。

「ガオウッ、うるさいぞお」

淵の奥からおそろしげな声がひびいてきたかとおもうと、すごい勢いで雨竜がまいあがってきた。雨竜はごうごうと渦をまきながら天にむかって飛びあがっては落ち、飛びあがっては落ち、荒れくるった。水しぶきが飛びちり、川はどこにあるのやら、淵はどこにあるのやら、渦にまかれて、まったくわからない。

かっぱたちは淵の底にしがみついて泣きわめくばかりじゃった。

何日かして、やっと洪水もおさまった。そこで、ほっとしたかっぱたちが淵の外へ顔を出してきた。しかしじゃ、外のようすを見ると、おったまげた。

こんどの洪水で、天竜川の川筋が淵より西の方に移っていたからじゃ。
「なんてことだ、下り松の淵が川筋から切り離されてるじゃないか。これじゃ川の水は淵には流れ込めない。淵がまるで池みたいになってしもうた」
と長老かっぱは頭をかかえ込んでしまった。そこへ、
「長老さま、たいへんじゃ。川奉行の中村新六さまが、この淵の水を川下に引いて荒れ地を田んぼにするとかで、村人を集めて淵から水を抜くトンネルまで掘りはじめとります。いまに淵の水はなくなるだよ、どうすりゃええ」
と、若いかっぱが息せき切って走ってきた。
びっくりしたかっぱたちは泣きべそ顔になってわめきだした。
「長老さまはうそつきじゃ、雨竜さまはわしらを守ってくださるどころか、あばれまわってわしらをこんなめにあわせてひどいじゃないか。わしらはどこにすめばいいのじゃ」
長老かっぱも悲しくなって思わず天をあおいだ。
そのとき、雲間からさす光の帯のなかを、金色に輝く雨竜が天にむかってのぼっていくのが見えた。そして、かすかに雨竜の声がきこえてきた。
「もう、おまえたちに迷惑はかけない。長老かっぱよ、中村新六に会いに行くがよい。淵にわしさえいなければ、きっとうまく事がはこぶはずじゃ」

「おおっ、あれは雨竜さまじゃ。とうとう天竜になられたんじゃ。わしは勇気が出てきたぞ、言われたとおり、さっそく川奉行の新六さまに会いに行こう」
すっかり元気をとりもどした長老かっぱは、いさんで淵から出ていった。
長老かっぱは草むらにかくれて、仕事から帰る新六をまった。
ぱか、ぽこ、ぱか、ぽこ、馬にのった新六が長老かっぱの前を通りかかったとき、
「いまだっ」と長老かっぱは新六の馬のしっぽに飛びついてさけんだ。
「新六さま、おねがいです。淵から水を引く工事を、やめてくだされ」
「おぬし、下り松の淵のかっぱだな。じゃが、工事をやめるわけにはまいらぬぞ、川下の田に水を引くには淵から水をとるしか、ほかによい方法がないのじゃ」
「新六さま、それはむごい、わしらかっぱの身にもなってくだされ。雨竜さまは、わしらかっぱにこれ以上めいわくをかけないために、天にのぼられたというのに、人間には情けというものがないのですか」
それをきくと新六は目を輝かせて言った。
「ほう、雨竜がいなくなったとは好都合じゃ、村人がひどくおそれておったからのう、これで工事がはかどるわい」
「ちがう、ちがう、新六さま、工事をやめてほしいのじゃ。わしらの願いをきいてくださったら、いいことを教えます。どうか、願いをきいてくだされ」
と長老かっぱは必死になってたのんだ。しかし新六は、にこにこしている。
「かっぱよ、わしに考えがあるのじゃ。工事は川下より先に、淵に天竜川の水が流れ込めるようにするのじゃよ。そうすれば淵の水がなくなることはない。工事がすむまで、おまえたちはわしの屋敷にある池にすめばよい、それでどうじゃな」
長老かっぱは飛びあがってよろこんだ。
「ひゃあ、そいつはいい考えじゃ、さすが川奉行の中村新六さまじゃ、思いやりがあって頭もいい。ありがたい、ありがたい」
礼もそこそこに、長老かっぱは飛ぶようにして、みんながまっている下り松の淵へ帰っていった。

やがて、村人総出で工事がはかどり、下り松の淵には天竜川の水がなみなみと流れ込んできた。淵からは川下の田にたっぷりと水をおくれるようになった。中村新六は殿様からおほめの言葉をもらい、村人からも感謝された。しかし、一番よろこんで感謝したのは、かっぱたちじゃった。下り松の淵に帰ったかっぱたちは、もとどおり、のどかに暮らせるようになり、長老かっぱの、淵の自慢がまた始まった。

「この淵は天竜さまが天から守ってくださっとる。それに新六さまのおかげで、淵は天竜川のきれいな水でいっぱいじゃ。こんなによい淵は、ほかにはない」

かっぱたちは、中村新六にお礼として、むずかしい病気をなおす不思議な薬の作り方を教えた。中村家では、この薬に「加減湯」と名をつけて売りだしたところ、たちまち評判になって諸国から注文が殺到し、中村家は代々末永く大繁盛したそうじゃ。

お話のふるさと伊那谷と天竜川

このお話は、長野県伊那地方に伝わる「カッパの妙薬」という伝説をもとに再話したものです。

お話のふるさと、伊那地方は、中央アルプス木曽山脈と南アルプス赤石山脈に挟まれた伊那谷と呼ばれる細長い盆地です。その真ん中を天竜川が流れています。伊那谷といっても、比較的、広々と開けた地域ですが、村も町も田畑や街道も人々の暮らしまで、天竜川と深く関わって発展してきました。

天竜川なくしては経済も文化も語ることができない地域なのです。

天竜かっぱのお話の中にも、天竜川はいきいきと流れています。

伊那谷の駒ヶ根市を訪ねると、天竜大橋のたもとに、天竜かっぱ広場がありました。そこには、かわいいかっぱの顔を模した、おもしろかっぱ館があり、庭には馬に乗った中村新六の像やかっぱの池、道路沿いにはかっぱの休憩所までありました。

「母なる川」天竜川にたいする関心や親しみを、この地の伝説に登場する「かっぱ」をとおして、誰もが楽しみ、遊びながら、深めていってほしいという願いをこめてつくられた施設で、駒ヶ根市教育委員会が管理しています。

かっぱ館の展望台からのぞむ天竜川は、雄大な木曽駒ヶ岳を背景に、絵のように美しく流れています。

「ハアー　天竜下ればしぶきにぬれる　持たせやりたや檜笠」と歌われる伊那節にぴったり似合う景色が、今でも広がっているのです。

天竜川はまさにこの地のシンボルと言えるでしょう。

この天竜川の流れは、長さ213km。長野県内、諏訪湖から始まり伊那地方を南流し、やがて有名な天竜峡辺りから深い渓谷を下り、静岡県の磐田郡掛塚の広い河口から堂々と遠州灘にそそぎ出ています。

〔訂正〕川の本 春号No.42「川にまつわるお話」の解説で誤りがありました。訂正してお詫びいたします。
九頭龍川の流域面積は2,930km²です。

おもしろ伝統漁

日本の各地に残るおもしろい伝統漁法です。今では、魚の捕りすぎを防ぐため、漁の仕方や時期に「きまり」があるので、むやみに真似をすることはできません。

イタチ追い漁

四万十川(高知県)に伝わるウグイを捕る漁法で、1、2月の寒い時期に行われます。

まず、ウグイがひそんでいる川底の岩の周りを、網で囲みます。次に、細い竹竿の先にイタチの皮を結びつけた道具を使い、20～30分かけて岩の周りや隙間を、まるで生きたイタチが泳いでいるかのように動かして匂いをふりまきます。すると、おどろいたウグイが逃げ出してきて網にかかります。

つづかけ漁

これは、筌漁と呼ばれる漁法と同じで、図のような「筌」という道具を使います。この「筌」を「つづ」と魚野川(新潟県)あたりでは呼んでいます。

つづかけ漁は魚野川のカジカ捕りの漁法で、雪代と呼ばれる白っぽくにごった雪解け水が流れはじめるころ、瀬に「つづ」が仕掛けられます。

地方によって、筌の形も多少異なりますが、原理は同じです。

徒歩鵜飼

500年もの歴史を持ちながら、唯一、有田川(和歌山県)だけに残る、船を使わない鵜飼です。

鵜匠は自分でつかまえた海鵜を2か月以上訓練してから使います。鵜がもぐると、その先の水面にさっと「たいまつ」の火を近づけます。光におどろいたアユは一瞬動きが鈍ります。そこを、すかさず鵜が呑み込み、呑みこまれたアユは鵜匠が上手にはき出させます。

漁期が終わると鵜は海へ帰してやります。

たのしいぞ 夏の川

暑い夏は水辺がいちばん。
川にはたのしめるポイントがいっぱいある。
キャンプ、水泳、魚つり、昆虫さいしゅう。
さあ、今年の夏は、川と遊ぼう。
心にのこる絵日記ができるはずだ。

鹿島流し（秋田県大曲市、丸子川）

毎年六月に入ると、大曲小学校の三年生は忙しくなる。今や、大曲に伝わる、鹿島流しの伝統を守る主役たちだからだ。図工の時間などを利用して、紙細工の武者人形をつくったり、思い思いに願いをこめた旗をつくる。さらに、一クラスに一そう、それら作品を飾りつける大きな鹿島船までつくってしまう。競うように飾りたてられた鹿島船は、六月二十七日、子供たちの歓声に送られて丸子川に流される。

同市、花館小学校では、六月下旬に三年生以上の児童の手による鹿島流しが行われる。また、藤本大保地域でも、六月中の日曜に子供たちが中心で鹿島流しが行われる。鹿島流しは、五穀成就、村民無病を願うこの地の伝統行事で、昔は地域ごとに各家庭でつくられた武者人形に、おやき、路銀（十文銭）などを背負わせ鹿島船にのせて流す華美なものだったそうだ。戦後、すたれていったこの行事を復活させたのは子供たちだ。決して豪華とはいえない手作りの行事だが、丸子川にあげた歓声は、子供たちの心に宝物のように残り、いつまでも鹿島流しの伝統は守り継がれてゆくだろう。

川へ行くとき　これだけは守ってほしい

・一人ではぜったい行かない。・友達とでかけるときも大人の人といっしょに行く。・人のいないところでは遊ばない。・行先はかならずつげて行く。・人のいるところで石をなげない。・おやつやおべんとうのあとかたづけはきちんとし、ぜったいちらかさない。・切れた釣り糸なども捨てないでもちかえる。

川のマメ知識

汽水域

汽水とは、淡水と海水がまざりあった水のことです。山で湧きだした水は淡水です。この淡水が集まって川になり、山を下り平地を流れ、やがて河口で海と出合います。この河口付近では海に出ようとする淡水と、川に入ろうとする海水がぶつかり合い、まざりあって汽水になります。
このような区域を汽水域といいます。

汽水域は、魚の種類が多いところで、スズキ、ボラ、クロダイなど海にすむ魚も入ってきます。
川と海を往復するサケ、アユなども汽水域を通りますが、純粋な淡水魚、ナマズやギンブナなどは、ここにはすめません。

(汽水湖)
浜名湖や宍道湖など、海とつながった湖があります。海水と淡水がまざった湖で、汽水湖または半塩湖などともよばれます。

河川愛護月間

7月1日→31日

8月1日は水の日です

河川環境管理財団は
みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

＊よりよい水辺のプランニング
＊楽しく安全に遊べる川づくり
＊川をきれいに、川を愛する心を育む運動
＊未来の水辺を考えた調査や研究
＊せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。

監修　建設省河川局

財団法人 河川環境管理財団
Foundation of River & Watershed Environment Management
(〒104) 東京都中央区入船1丁目9番12号
TEL.(03)3297-2600(代表)